

クリスマスの童話

羊飼

鈴木正久

きよらに星澄む今宵
神の子、あもりましぬ

ゲハチはね、元気で伶俐な少年の天使だったよ。今日もね、天国で走りまわっていたのさ。犬や狼や猫も皆負けずにゲハチと一緒に走廻って遊んでいるのさ。生命の河の岸边をバシヤバシヤ水をはねとぼしながら、かけていくと、キラキラと、水晶やダイヤモンドのように水玉がとび散る。むこうの方からやって来た一人の青年の天使が、ニコニコしながら、生命の木の実のリンゴを一つもぎって、ゲハチにくれる——「ああ、お兄さん有難う。」

ゲハチはね、どの天使も好きだったんだけどガブリエルが一番好きだったんだよ。まるで父親のようだね。何故って、ゲハチは天国に来たとき、ガブリエルの腕の中にだかれて来たんだ。それにガブリエ

ルが天使の軍勢を引連れて「主の御用」に出かけるときは、とても勇ましかった。

そのガブリエルがね、今、ゲハチが走ってゆくと向うの方に立っているのだ。考え深そうに下の方を見ながら……。ゲハチは、その太い腕に飛びついた——「おちさん、何しているの。」「ああ、ゲハチか。そうだ、お前も連れて行ってやろうかな……。」「うん、どこでもいいから連れていっておくれ。今日はどこ行くの。」「今日か。今日は、主のお告げに行くのだ。」

ゲハチにはよくわからない。だが、主の御用なら立派なことにきまっている。ゲハチは喜んだ。

天の軍勢の出発

清らに空がすむ宵^{こよひ}、やがて夜になった。さっきからゲハチはガブリエルのそばに腰かけている。ガブリエルは深く黙想している。天使の軍勢は常にもまして大勢で、本当に力強かったが皆、静かに沈黙している。だが中にはゲハチを見つけて、ほく笑みかける天使もいた。やがてガブリエルが右手をあげて合図すると一同は出発した。先頭のガブリエル、その

そばにゲハチそして皆、星の間を下っていった……。

……やがて夜の空の下に灰色の石ころの多い山地の小さい町が見えてきた。ベツレヘムだ。その田舎町の通りのそばの一軒の家の横手に来た。その時、ゲハチはガブリエルの腕にさわった……ゲハチは悲しそうな顔をしていた……「おちさん、ここ、僕、知っているよ。」ガブリエルはゲハチを一寸見て、うなづいた。

……ゲハチは、はっきりと思い出した。丁度一年前、ここで気がついた時、ゲハチはガブリエルの腕にだかれていたのだ。

ゲハチの頭の中に浮かんでくる思い出……その時、ゲハチは、この通りの道を歩いていたのだ。父親と一緒に。

ゲハチの父親はガリラヤの百姓だったのだけれど、戦乱で土地をなくして、避難民になってしまったのだ。首都のエルサレムにでも行ってみれば何か仕事が見つかるとゲハチをつれて心細い旅をしてきた

のだ。父親は正直者だったけれど、どうも伶俐巧者ではなくて、ゲハチの方が時々注意してやったりした——「お父さん、道、間違えてないかい」とか「お父さん、エルサレムへ行って大丈夫なのかい」とか。そんなとき、お父さんの方がまるでゲハチを頼りにするように、気の弱そうな笑い顔をして、ただゲハチの手をにぎったりした。

この町に入ったとき、ぼつぼつ夕方近く、お父さんがかついだ袋の中には貧しい着がえなんかと一緒に、パンもまた一かたまりは入っていたけれど、一人息子のゲハチのために親父さんは、道端で荷をひろげている露天商から乾した無花果でも買ってやろうと、貧しい財布の小銭をさぐっていた時だった……ゲハチは丁度そこを通りかかった羊の群を見ている。数人の羊飼いたちに連れられて、親羊、仔羊、バアバア。みんな可愛い。ゲハチは、その鼻つらをなでてやったりしている。羊飼いは「やあ今日は」なんて半分冗談まじりにゲハチに挨拶したりしている……人々の呼び声がおこった。「あぶない」「あぶない」という大声。

むこうの方に砂煙りがたっている。ああ、もう、や
つて来る。ローマの武士が、この狭い通りを戦車を
はしらせて来るのだ。エルサレム駐屯部隊の将校か
も知れない。エリコにでも遊びに出かけた帰りだろ
う。酒に酔って二頭の馬にピシピシ鞭をあてて、戦
車をつっぱしらせて来るのだ。あぶない。羊飼いたち
は羊の群れを必死に道のかたわらに寄せさせる。ゲハ
ヂも人々や羊たちと一緒に道の隅に身をよけ
た……だが人々の間に押しつけられてゲハヂから離
されてしまった父親が、ゲハヂの方へ手をのばしたの
と、ゲハヂが「ああ、お父さん」と叫びながら、目で
通りの真中を指さしたのと同時だった。逃げおく
れた仔羊が、そこにうろうろしていた。戦車が来る。
仔羊は助かった。両腕で仔羊をかかえて道の向う
がわによせたゲハヂは、しかし、胸から下半身を戦
車にはねとばされ轢かれてしまった……。

羊飼いたちは驚いてかけよった。ゲハヂの父親は、
おろおろとして為すところを知らない。人だから。
丁度、その道に面した家は宿屋だった。人々はゲ
ハヂを取敢えず、そこにかつきこもうとした。だが、
この騒ぎを見ていた宿屋の親父さんとおかみさん

は、急に洗面いやなかおをする。互に一寸顔を見合わす。
おかみさんがどなる——「ちよつと、よしとくれよ。
血だらけぢやないか。うちの中へなんかかつきこまれ
ちや、こつちが迷惑だよ。」羊飼いの一人が憤慨す
る——「なんだと、この極道者。一体おまえら
は……」……だが、他の羊飼いが、どなる——「よせ、
よせ、喧嘩してるより手当だ。おい、それならあん
たのこの横手の馬小屋、ここならいいか。」宿の
親父は、勝手にしろというように見ている。羊飼
たちは人々の手をかりて、自分たちの着物を破っ
てゲハヂの傷の繃帯をする。寝かすところがない。
驢馬や牛が餌を食べる飼葉おけにゲハヂを横たえ
る。誰かが葉を差出す。皆、ゲハヂの顔を見守って
いる。だが刻々その顔から血の気がひいていく。ゲハ
ヂは死んでしまった。茫然としている父親……一人
の若い羊飼いが「なあ、わしらと一緒にくらそうな」
——ゲハヂの父親の肩に手をおいて、ただ、そう繰
返し云っている……。

ゲハヂは、あの時のことをみんな思い出した。涙ぐ
んでいる。ガブリエルは、そのゲハヂを見て、うなづい
た。そして目で、あの馬小屋をさし示した。天使の

軍勢も皆、まったく静かに、しかし全部の者が、この馬小屋に目を向けている。主の栄光が満ちている。ガブリエルは、ゲハチに、その飼葉おけをさし示しながら、ぬかずく。

キリストの誕生。主イエスが、今宵、ここで、お生れになったのだ。

「あつ、僕のベッドに……イエスさまが僕の、あの飼葉おけに……」

ガブリエルは、ふたたび手で合図する。天使の軍勢はふたたび出発する。どこえ。主のお告げをするのだ。知らせるのだ。ガブリエルはニコニコしている。ゲハチも不思議な驚きと喜びで心をふるわせている。ベツレヘムの町の郊外。野宿の羊飼たちがまどろんでいる。ゲハチは「お父さん」と叫んだ。そこにはゲハチのお父さんがいた。羊飼になって皆と一緒にいた。まわりに沢山の羊たちがいた。そして、ゲハチのお父さんの傍には、あの仔羊がねていた。ゲハチが助けた羊だ。丈夫で、もうずい分大きくなっている。お父さんはこの仔羊をいつも自分の子供のように傍につれていた。

ゲハチのお父さんは目を覚ました――「あ、ゲハチ……」。ゲハチはニコニコしている。天使のゲハチを見て、お父さんは言葉も出てこない。羊飼たちは皆、目を覚ました。

ガブリエルは大声で、お告げをした。

「恐れるな、見よ。すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたのために伝える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。この方こそ主なるキリストである。あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それがあなた方に与えられるしるしである。」

天使の軍勢は皆そろって、大声で主を讃美する歌を歌った。ゲハチも負けずに大声で歌った。

「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように……。」

羊飼たちは、やがて、我にかえった。ベツレヘムの町で、そして飼葉おけの中に。

だが、天使が云った飼葉おけはどこだろう。ベツレヘムの町は小さいけれど、馬小屋や牛小屋は百以上もあるぢやないか。

だが、ゲハヂのお父さんは、いつもに似ず「わしが知っているよ。わしが知っているよ。」と云うんだよ。そしてね。あの仔羊の首環をひきながら、もうどんだん皆の先に立って歩き出したんだよ。それで、ほかの羊飼たちも皆、思い出した……。

ベツレヘムの馬小屋、飼葉おけの中にお生まれになったイエスさま。こんなに貧しい。だが主の栄光が満ち満ちている。ヨセフさんとマリアさん、天使たち、そしてゲハヂも。

ゲハヂのお父さんは、仲間の羊飼や羊と一緒に、ここにやって来た。

あの仔羊の首環に相変らず手をかけたままお父さんは涙を流している——「ゲハヂ……」——お父さんは、そう云って、皆と一緒に主の前にひざまづいた。天使の歌声が空にみちている。

(これでおしまい。これは去年のクリスマス祝会に話したものです)

……

きよらに星澄む今宵
神の子あもりましぬ
けがれにそめる世人に
生命を与えんために
望みのあしたを迎え
喜びの主を仰ぐ
ああ 誰も 聞け
み使の 歌声 空わたるを
キリスト あもりましぬ